

ライアの虚構論における知識観と図書館情報学における知識観

鈴木 友里亜

図書館や図書館情報学の文脈において、科学的・歴史的事実について書かれている本は主に知識資源として扱われるが、小説などフィクションの本は娯楽あるいは読書教育の教材として扱われることが多い。しかし、一般的に知識と呼ばれるような現実世界で利用可能なものを、フィクション作品から得るということもある。本稿ではフィクション、すなわち虚構の作品から知識を獲得するプロセスを明らかにし、得られるとされた知識と図書館情報学における知識観とを比較することを通して、「虚構から得られる知識」について図書館情報学で扱うことの可能性について検討を行うものである。

本稿ではまず虚構から知識を得られると明言しているライアの虚構論について、その背景となる各論を踏まえ、彼女の虚構観と知識獲得プロセスを中心に検討した。そして、そこで得られた知識観と、武者小路による図書館情報学における知識観のまとめとを比較し、両者の類似点・相違点について考察を行った。

ライアの虚構論は、主にルイスによる可能世界虚構論、サールによる言語行為論に基づく虚構論、ウォルトンによる「ごっこ遊び論」に基づく虚構論を踏まえた上で成り立っている。ライアは我々が虚構を読むときには、可能世界の集合である可能世界宇宙において、その中心が、我々の現実世界から虚構的作品が事実であるような一つの可能世界へと移動しているのだとしている。この中心移動の際、「到達関係」と「最小離脱法則」に従って移動先の世界が選択されるが、このうち「テキストに書かれたことが事実であるような世界の内、現実世界から最も近い可能世界へ移動する」という「最小離脱法則」の逆用により、虚構から現実世界の知識を得られると彼女は述べている。しかし、その詳細については著作内では触れられていない。

本稿ではこの逆用について詳しく検討し、虚構世界から現実世界に向けて最小離脱法則を到達関係と合わせて適用することで、現実世界と比較可能な程度に包括的な虚構世界のありようを描き出すものとした。そして両者の比較を通して理論が破綻しないものと、そもそも現実世界での知識が変更を加えられずに保たれているものに関しては、虚構のテキストが由来であっても現実に利用可能な知識として獲得可能であると結論付けた。

この知識観と武者小路による図書館情報学における知識観とを比較した。虚構から得られる知識は、図書館情報学における主流である科学・学術・専門的知識や公的に認定された知識とは相いれないものの、個人の主観的知識という見方とは合致するものであった。また、知識の公共性やメディアとの関係性については、関連・共通する部分も見受けられたものの本稿での研究のみからは判断しかねる点も多く、虚構論と図書館情報学の双方の観点から一層の分析が必要である。

(指導教員 横山幹子)